

取材活動は、節度があり、真摯であって欲しい

福知山線脱線事故の悲惨さは、目を覆うばかりであり、被害者、遺族の悲しみ、悔しさ、また、企業体質が事故の背景にあることが次第に明らかになり、企業への怒り爆発、無念の思いをぶつけるのはいかしかたないと理解できる。

我々は、こうした被害者、遺族の様子をマスコミの報道から得ている。事故後、JR西日本とマスコミとの記者会見シーンも多く目にした。

ただ、ある日のその中に、ある記者が声を荒げて怒りの感情を露わに企業側を詰問するシーンがあった。声の様子から若い記者の印象を受けた。

つい直ぐに、あるメル友に「『客観的事実を報道し、真実に迫る』というマスコミの責務に携わる者として、いくらJR西日本の幹部との記者会見とはいえ、こうした記者の暴言は許されるだろうか？」と、あるメル友にメールしたぐらいだから、そのシーンの不愉快さは自分には相当なものであったのだろうなあ、と今となれば思う。

あにはからんや、昨夕のTVニュースで、「記者会見における記者の暴言の件で、Y新聞社が謝罪した。」との報道があった。今朝の全国紙でも「記者会見で暴言 Y新聞が謝罪」との記事があった。

不愉快に思ったのは、自分だけではなく多くの視聴者も同様であり、また、それを問題視したマスコミ従事者もいたということであろう。

何か悲惨な事故、事件があると、堰を切ったように、時にはバッシングでないかと不愉快さを感じる報道が多い昨今だけに、報道取材姿勢に対するバランス感覚が世間の中でも衰えていないこと、また、マスコミ自体にもあったことを知り、どこかホッとしたものを感じた。

報道に携わる人には、「ペンは、剣より強し！」の真の意味を肝に銘じ、はき違えることなく、節度をもって真摯に取材活動をして欲しいものである。

我々は、事故、事件の背景にある社会の病巣を洞察することから、同様な事故、事件を起こさないことを学んで行かなくてはならないだけに、感情移入せず「客観的事実を報道し、真実に迫る報道」を期待する。

(2005 年 5 月 14 日 記)